

難波西鶴

海の道

【4】

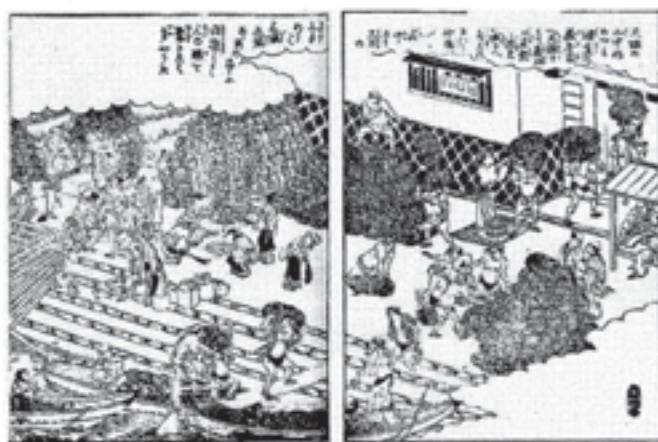
森田 雅也

江戸時代、米を満載した千石船は、大坂や江戸といった都市部を目標しました。特に西鶴のころの大坂は江戸より好まれました。何しろ、天下の台所ですからね。

当時、徳川家の直接領地である天領も、各藩も税収入のほとんどが米です。武士が当時の公務員なら、例えばその俸給は年米50俵というように決まっています。米50俵なんて食べ切れないと喜んではいけません。人は米のみにて生きる者にあらずなのです。

『武士の家計簿』なごで話題になりましたが、その家計簿は慶弔費や何やらで収入の半分以上が現金で消えてしまうのです。そうなる、米をどう高く買ってもらおうかですね。個人も藩も幕府もそのことを考えている、米商人が甘くささやくわけです。私に米を任せれば、100万円の収入を110万円にしますよ、というわけです。いい話です。

元手にした「わらしべ長者」も



『摂津名所図会』(関西学院大学図書館所蔵)「中之島」雇いた米俵を蔵屋敷に運び入れる様子

なく、北浜にありまして、連載2回目に書いたように大坂から広がる「海の道」から、米が千石船などどんどん運ばれてきます。米俵は大坂の浜にまぎしく俵積みされます。米俵は米役人というものがいました。下級役人ですが、米の品質を調べ、その穴から運搬中に少

しの米がこぼれます。北浜で、このこぼれた米を掃除していた女性がいきました。母子二人のなりわいに公認された仕事でしたが、北浜のにぎわいとともに、その米の「ミ」が増えていきます。その米をひそかに売って小金にすると、20年間で相当たまりました。その苦勞を見て育った息子は、この小金を元手に金融業、さらに大手商人相手の銀行業にまで発展し、ついには大名相手の大銀行家になります。そうすると、老舗の大商人が入り婿を願ひ、「わらしべ長者」のような身分になります。

この話は西鶴の『日本永代蔵巻一の三浪風静かに神通丸』。読んで元気になって下さい。

(関西学院大学文学部文学言語学科教授)

海の道から届く米